

## 西淀川記憶あつめ隊

Vol.4

西淀川には東京の佃島のルーツになった「佃」という地域があります。左門殿川と神崎川には生まれた島です。今回は佃の歴史を調べている八木一夫さんに昔話を聞きました。

2012年9月19日  
聞き取り



八木一夫さん

八木一夫さんは昭和11年、佃生まれ、佃育ちです。

小学生だった頃は、神崎川が綺麗で、みんなで泳いでいたそうです。近所のガキ大将を中心として泳ぎの隊列を組み、小さな子どもがきちんと渡りきれないように、大きい学年の子どもが周りを囲んで泳いでいました。川で泳ぐデビューは小学校4

年生ぐらい。対岸に着くときは、川に流されたようですが、「それも計算して泳いでいたよ」とのこと。八木さんの下の世代からは、川が汚れて泳げなくなってきたそうです。川に囲

まれた西淀川で、川とともに生きていた世代がうらやましく思いました。

現在の新佃公園は、戦争中に建物疎開させられてできた空地の後に作られた公園だそうです。建物疎開とは、空襲による火災の延焼を防ぐ目的で、空地をもうけるために、建築物を強制的に撤去しました。八木さん



新佃公園

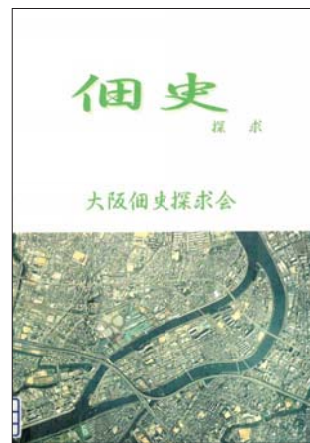
の自宅は、昔は新佃公園にあつたようですが、小学校3年生のときに建物疎開で引越したとき余儀なくされます。当時、佃2丁目には日本グリセリン工業という工場があり、爆薬の原料を作っていました。

八木さんの実家は「青田屋」を営んでいました。いわゆる「青田買い」です。作物が実る前から買い取る交渉をして、天満市場へ売りに行く仕事をおじいさんの代からやっていました。八木さんは、中学校から尼崎にある住友中学校・住友工業高等学校に進みます。この学校は住友の職工を育

てる学校でしたが、戦後の再建途上の経営上の諸事情もあつて1956年3月尼崎市に移管されたことで、八木さんは住友に就職するのでなく、様々な仕事をしながら実家の青田屋を継いだそうです。「佃にも畑が沢山あつた

よ。1丁目のマンションがあるあたりは畑やつたなあ」とのことです。今では想像ができないですね。1977年には青田屋を止めて喫茶店を開きます。ちょうど佃コーポの建設が始まった頃で、建築作業員が沢山いたそうです。「喫茶店やっただけど、まるでめしやみたいやっただわ」と笑っていました。佃の変化を見つめてきた八木さんは、喫茶店を閉めた後は佃の歴史の編さんや、東京の佃島小学校と佃小学校の交流事業に携わっています。佃では昔はなまり節を使った箱ずしを食べていたことも教えてもらいました。みんなで食べる機会を計画中です。お楽しみに。

●



佃の歴史がわかる「佃史探求」